KAN

環

千曲川地域の人と文化

蒼翠
2013
第11号

NPO法人上田図書館倶楽部　　2013年7月

蒼翠（そうすい）

山水画家・郭熙（かくき）の画論「臥遊録（がゆうろく）」より
夏山蒼翠（そうすい）にして滴るが如く

緑育む

山々に囲まれた上田塩田地区の水田には、日中、強い日差しが降り注ぐ。田んぼの稲も順調に育ち、あたり一面を鮮やかな緑が覆う。

田植えの頃、ケロケロと騒がしかった蛙たちも稲の葉陰に潜み、安らかな憩いのひとときを楽しんでいるかのよう。　そんな空間が、訪れる人々の心を癒し、元気づけてくれる。農村が持つのどかで魅力的な風景です。

contents

4　信濃の美術館を歩く
杏の里板画館　板画と民芸の小さな美術館 --- 海野郁

8　はつらつシニア　田中袈裟平さん --- 伊藤文子

11　観点「したたかに日本！」--- 岡田基幸

14　千曲川地域の芸術家を訪ねる
篆刻家 陸氓卿さん --- 吉池みどり

16　連載「「ラ・マンチャの白い風」------- 桜田義文

19　波紋 ～民芸の街・松本～ ---- はな

20　寄稿　「忘却のえびす講物語」--- 清水たか子

23　『明日をひらく図書館－長野の実践と挑戦』
を発行しました　--- 宮下明彦

26　あとがき

信濃の美術館を歩く

展示室舞台

杏の里板画館（ばんがかん）

板画と民芸の小さな美術館

風薫る5月、千曲市森の杏の里は、花見客が去って本来の静けさが戻る。周囲の山々は、青葉若葉が濃く淡く萌えてまぶしいほどだ。その山懐に建つ杏の里板画館は、棟方志功と日本板画院の作家たちの作品や、内外の民芸を中心に展示している美術館である。

杏の里板画館入口

入口のくぐり戸から懐かしい古民家の風情である。2階は広々とした展示室で、地元の宮大工の棟梁が組み上げたという天井や壁などの小屋組みが美しい。この日開かれていた企画展「長谷川富三郎板画展」の力強い作風が一段と引き立つ。

中央にはコンサートや講演が催される舞台があり、その裏手の和室は何やら隠し部屋めいている。ここには棟方志功の作品や、陶芸などの民芸が常設展示されている。

もとは北信濃の古い切妻造りの風格と特色をよく残した建物だったという。「古きを守るも開発なり」という民芸運動の指導者、柳宗悦の言葉を合言葉に、1995年に美術館として生まれ変わった。

ご自身も板画家である館主・森貘郎（ばくろう）さんに、板画館や板画などについてお聞きした。

◇　◇　◇

Q 杏の里板画館ができたいきさつをお聞かせください。

この建物は、江戸から大正時代まで四代続いた漢方医の屋敷だったんです。庭に大きな多行松がそびえ立つことから、村人から「千本松の家」と呼ばれていました。ただ、最後に住んでいたお婆さんが亡くなった後は7年間空き家で荒れるにまかせ、幽霊屋敷などと言われていたんですよ（笑）。このまま朽ちさせてしまうのはと、「杏の里板画館をつくる会」が発足、全国から多くの方が手を差し伸べ

てくれました。古民家再生に力を入れる建築家・降幡廣信さんが中心になって調査、設計し、再生して美術館となりました。

Q「板画」と「版画」はどう違うのでしょうか。

板画は、昭和17年に棟方志功さんが使い始めました。板の魂、板の声を聞くということから生まれた言葉です。もともと江戸時代の浮世絵職人は板画だったのです。一方、版画という呼び方は山本鼎が始めたと言われ、欧米の影響が強く、モノマネ的な版画に対する棟方の批判が板画という言葉になったと言われています。

Q森さんが板画家になったきっかけや、同人である日本板画院について。

私は、棟方志功の死後の一番弟子なんです（笑）。その板画思想に共鳴し、創作を続けています。日本板画院は、昭和27年に棟方の呼びかけで結成されました。毎年板院展を開催、私も30回展からずっと出品しています。今年も6月に第63回板院展が東京都美術館で開かれます。

森獏郎さん

（森さんは、昨年の板院展で長谷川富三郎賞を受賞されている）

Q杏の里板画館の展示や、板画館これからについて。

毎年春には、あんず祭に合わせて「杏まつり手づくり展」と企画展を開催しています。板画院同人の作品、陶芸や型染などの民芸は常時展示しています。

6月25日からは、若い作家の作品展「TRIPLEX　岡澤加代子・長野順子・中村未來　版画三人展」が始まります。若い人と一緒にやることはこちらにとっても力になりますね。そして、ここを活用してもらうことが板画館を続けていくうえでも大事なことだと思っています。

来年は開館20周年を迎えるので、

「信州と棟方志功展」（仮題）を計画しています。

◇　◇　◇

今年は小林一茶生誕２５０年である。一茶の句に魅せられ、作品を作り続けている森さんにとっても一段と忙しい日々のようである。４月には一茶にちなんだ森さんの作品が記念切手シートになり、人気となっている。秋には「あそべや一茶展」（於：長野市）なども計画されているという。

窓際の風景

一茶だけでなく、森さんは山頭火や栗林一石路にも魅せられ、独自の創作活動を続けている。青木村出身の一石路については、森さんが板画に彫り、見直されるきっかけとなった。板画絵本『はなとり地蔵』、『森貘郎板画集』など多くの著書も持つ。

あらためて展示室を巡ると、森さんの作品はごくわずかだ。他には１階の受付付近に数点展示されているだけである。声高に語ることもなく、飄々とした佇まいの森さんだが、広い視野と秘めた情熱を持った方だとお見受けした。あえてご自身の作品を前に出されないところも、森さんらしい。そんな森貘郎さんありきの杏の里板画館である。

平成25年５月９日訪問　海野　郁

杏の里板画館

入館料　大人３００円／小・中学生１００円

開館時間　午前10時～午後５時（要電話予約）

休館日　毎週月曜・火曜（あんず祭期間中は無休）

冬季休館　12月１日～３月末日

所在地　〒387-0005　千曲市森２１５４

TEL .026-272-4758

はつらつシニア

田中袈裟平さん

好奇心と挑戦する気力

「田中さんのように年を重ねたい。模範です」と周囲の憧れのまとになっている「はつらつシニア」をご紹介します。上田市踏入在住の田中袈裟平さん、93歳である。このお年でお元気というだけでも驚きだが、何と田中さんはパソコンの先生である。しかも生徒さんは70人以上というから2度びっくり。さらに、田中さんは現役のドライバーでもある。自宅からパソコン教室が開かれる上田市高齢者福祉センターまで、月に10回以上通う。視力も正常で、運転は全然苦ではないという。このように、年齢を全く感じさせない田中さんに福祉センターでインタビューした。

田中さんは信州大学を卒業後、軍に入隊した。シベリアへの連行を含め8年を過ごす。多くを語らないが、つらい体験が多かったに違いない。こ

の軍隊での生活がその後の人生に大きな影響を与える。「無事帰国したら奉仕の精神で過ごそう」と決断する。戦後は高校の先生になり、生物化学を教える。教え子との付き合いは今でも続き、毎年同級会に招かれる。教え子から長年慕われる田中さんのお人柄がうかがえる。

退職後は高齢者学園の事務局長になり、シニアの学園生活をサポートする。その頃からワープロを使い始めた。その後、パソコンを独学で習得し、13年前からお年寄りに教えている。この間約60年、「奉仕の精神」は田中さんの心底で通奏低音のように流れている。

Q　健康を維持するのに何かやってらっしゃいますか。

毎朝30分ほど歩きます。真冬でもマフラーとマスクで防寒して出かけます。それと何でも食べます。30年ほど前に妻を亡くし、現在は娘夫婦と暮らしていますが、毎日娘の手料理を頂いています。

Q　パソコンはどのように習得されたのですか。

はじめはワープロでした。習いたい人に教えていたらパソコンの時代になり、こちらもマニュアルを読んだり人に聞いたりして身につけました。ワープロの生徒さんがそのままパソコン教室へ移り、その後少しずつ増え、現在60代から80代まで73人です。

Q　そんなに大勢の生徒さんにどうやって教えていますか。またどんな内容を？

7グループに分け、1グループ約10人にしています。それぞれのグループのレベルや要求に合わせて課題を作り、それに沿って進めています。内容はワードとエクセルが多いですね。

Q　毎回課題を用意するのは容易ではないと思いますが。

そうですね、でも楽しみでもあります。生徒さんの顔を思い浮かべながら工夫を凝らします。必ず

「課題がうまくできた時が嬉しい」と
熱心に学ぶ受講生

1箇所落とし穴を入れたりしてね、ははは・・・

田中さんはユーモア心を覗かせる。訪れた日は皆さん、オリジナル便箋と左の写真のようなシートに取り組んでいた。「グループにしてコピペ」「この絵は背面にして文字は前面に」など専門用語がポンポン飛び出す。報告書などしか作ったことのない自分には到底できそうもない。

この日の課題シート

Q　パソコンのＯＳが次から次へと変わり、対応が大変ではないですか。

大変ですが何とか対応しています。新しいデバイスには興味があり、家では娘の iPad で遊んだりしています。

Q　それにしても皆さんリラックスして楽しそうですね。

「おこらない主義」で教えています。お互い年寄りなので絶対におこりません。同じことを何回聞かれても「この前教えたでしょ」などとは言いません。

Q　最後にシニア世代に何かメッセージをお願いします。

技術はどんどん進歩しています。年をとってもその変化にある程度ついていった方が楽しいと思います。そのためには好奇心と挑戦する気力を持ち続けることが大切ですね。

「パソコンを通した活動をしているときが最も充実している」と話す田中さんの意欲は衰えることがない。娘さん夫婦と時々ドライブに出かけるそうで、「それも楽しい」とにこやかに話す。緊張とリラックスがバランスよく生活に溶け込んでいるのが、お元気の秘訣と確信した。

「好奇心と挑戦する気力」田中さんが強調された言葉をかみしめながら福祉センターを後にした。

平成25年4月26日訪問　伊藤文子

観点

したたかに日本！

最近、海外に行くと、よくつまずく。歳を取ったせいもあるが、日本では余計な段差があまりなく、足下に注意して歩く必要がなくなったのかもしれない。海外では、何でこんなところに段差があるのかといったことが度々。高級の部類に入るホテルにしても、部屋は広いが窓や床も汚れ、決して清潔とはいえない。つけようと思った電灯の電球が切れていたり、電灯も一斉についたり、消えたり。一方、日本のリーズナブルなビジネスホテルでのバリアフリー設計、省エネ対応、朝食バイキングでの人の流れをみた料理配膳、チェックアウト時のスムーズさ。部屋自体は狭いが居心地がよい。

海外ではサービスの面での「詰めの甘さ」を感じてならない。しかも、この差は詰まるようで実は詰まらない差だとも感じる。几帳面な日本の国民性が大きく寄与してきた部分だ。日本に来る外国人は、最初は、日本のサービスの良さを感じるであろうが、リピーターになればなるほど、日本のサービスの根底にある凄みを感じるだろう。ついには、その快適性を自国でも求めるが、できないという模倣の限界を感じるであろう。一度味わった日本の快適性を忘れることはできない。

結局、自動車では、省エネで基本機能が高く、バリューの高い日本製の車が売れているのも納得。自動車、電器、ＰＣ、携帯電話、スマートフォンに次ぐ、製品商品は一体何か。住宅、新エネルギー、医療、健康、車輌、定期運行システム、ＩＰＳ細胞、航空、宇宙、教育、運輸システム、原発、

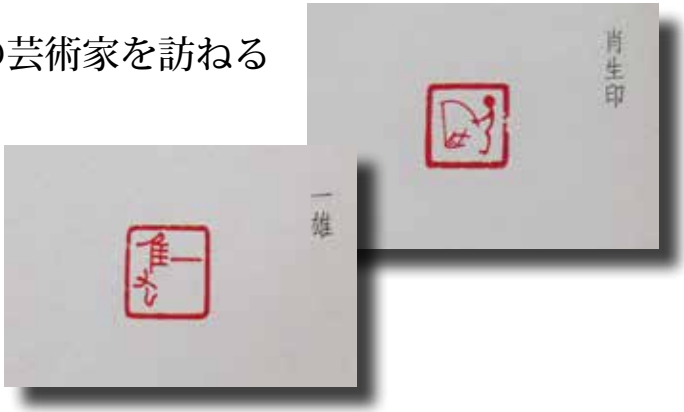
アニメ、ゲーム、ファッション、温熱素材・・・・・・。日本が秀でたものがたくさんある。さらに最近では、野球、サッカー、体操、陸上といったスポーツの分野でも。ガラパゴスと揶揄され、失敗も経験できた日本。海外留学する若人もおり、海外で活躍する技術者もいる。世界に先駆け、このようなことを次々と生み出せる国民性に自信を持つことが大切である。世界中が羨ましがる日本国のパスポートを持てる日本国民が下を向く必要は決してない。

一般財団法人浅間リサーチエクステンションセンター専務理事
信州大学繊維学部　特任教授・工学博士　岡田基幸

伝統を守る岳（たけ）の幟（のぼり）祭

上田市別所温泉広場では、岳の幟に携わる道中傘の方々が正面に陣取る。
ザッ、ザッ、ザッとリズミカルなササラの響きと踊り。彩り豊かな花笠に浴衣が似合う乙女たちが披露する。５００年を超えた伝統行事である。
毎年、７月中旬の休日に行われる。

千曲川地域の芸術家を訪ねる



篆刻家

陸氓卿（りくぼうけい）さん

４月の光穏やかな日、孫の五月人形を求めるため人形会館松葉彌（上田市天神）を訪れた。一通り買物を終え雑談をした時、店員さんが「社長は篆刻（てんこく）教室を開いています」と話してくれた。さっそく社長の陸さんへの取材をお願いしたところ、快諾していただいた。

陸氓卿（関睦夫さん・人形会館松葉彌社長・上田市原町）は篆刻の世界の雅号である。篆刻とは、書画の落款印など実用以外の趣味的な印を彫ることで、とくに職人に任せず、文人墨客が自分でやることをいう。

陸さんは10歳の時に書道を習い始めた。その先生が篆刻をやっていたので、陸さんも自ずと14歳で篆刻の世界に入った。まもなく頭角を現し、日展には18歳の時に入選している。高校卒業後、大東文化大学でも篆刻を学んだ。

篆刻は江戸時代の初期に中国から明朝文化とともに伝えられた。ＢＣ７００から８００年に中国で印章が生れたが、「印は信なり」の印章は年月を経ても変化しないもので、印店で扱う。それに対して篆刻は「作品に押すもの」で使う人が自分で彫ることが多い。材料は蝋石（ロウセキ）より硬く、大理石より柔らかい石、それを軟玉（ナンギョク）と呼ぶ。彫るのは鉄筆と呼ばれる両刃の小刀１本で、あまり小細工しないで仕上げる。現在は石材が多種多様な事から印材そのものを蒐集する趣味家も多い。また、名家の作品を押し集めて冊子にした印譜（インプ）は研究・鑑賞対象として蒐集家も多い。

全国を網羅する書道展は読売・毎日・産経の三新聞社がそれぞれ主催する。陸さんは産経国際書会理事としてご活躍。東京を中心に活動しているが、展覧会には年に３～４回ほど出展する。時間的に県内の展覧会に出す余裕はない。注文に応じて彫る応需印に力を注ぎつつ、展覧会に出展する作品に精を出す。実印としての応需印は客に拘りがあるので、彫るときは

彫り作業中の睦氏

客の顔を思い出し一彫り一彫り思いを込めて彫っていく。機械彫りに比べ時間、経費とも何倍もかかるが客は待ってくれる。これでいいということは無く、いつも「次は」という気持ちで石材に向かう。篆刻用の書体の彫り方は字を彫るか、残すかの2通り。字体は甲骨文字・大篆文字・小篆文字・印篆文字・隷書等があり、文字としてではなく素描としてとらえるので、線の自由さを表現できる。文字は時代に合わせた字作りが不文律だ。約束事が多い方が自由度は高い。現在は自由奔放な表現が、とくに展覧会などで流行している。篆刻の基本は、まずは漢文が読め、文字学があり、書が書けることで、奥が深い。篆刻は、彫る印稿作りに全体の3割、彫るのが1割、彫りあげた後の化粧などの処理に残り6割のエネルギーをかける。上田市で「印と書の教室」、それに「篆刻の通信教育」もやっているので福島、福岡等の遠方から送られてきた作品の添削にも時間を費やす。

教室の看板

（酒井康堂・子遠一門会　忘形印社代表、「心芸墨美作家協会運営委員」「産経国際書会理事」等の肩書を持つ。）

平成25年5月13日訪問

吉池みどり

おもしろWeb

山の天気

http://season.tenki.jp/season/mountain/

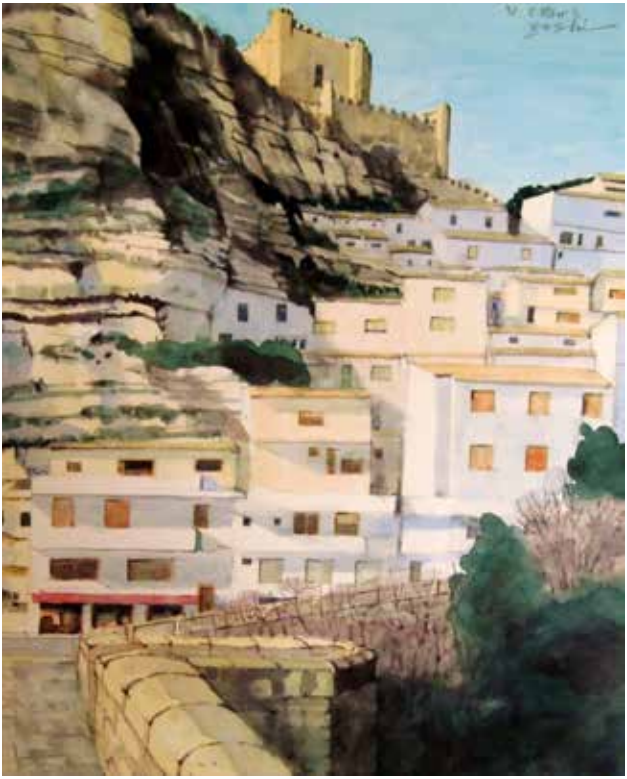
これから夏山に登る人も多いことでしょう。山の名前で天気予報を見ることができるサイトです。たとえば浅間山を見ると長野県中部（松本）の天気予報が表示されますが、あわせて近隣の天気予報として、嬬恋村、軽井沢町、御代田町の予報も表示されます。

連載 **ラ・マンチャの白い風** 桜田義文

谷間の村

二年ほど前、ラマンチャの秘境を訪ねる旅にでかけた。宿は「ボデガ デ ラベンタ」というワイナリーをホテルとしたノンベエには理想的な住まいであった。

いつものようにたいしたあてもなくラマンチャの光と影の風景を満喫しながら細い道を走っていると、いきなり目の前から平原が消えてしまった。目がくらくらして車を止めて車外に出る。とにかく信じられないことが起こっているようだ。確かに道はある。ふりかえれば見なれたラマンチャの大平原がある。ところが目の前には大平原がない。目の前で平原がすっぱりと切れ落ち、深い深い崖となってはるか下の谷底まで続いているのが見える。まるで怒り狂った白い龍が思い切り暴れまわったようにするどく切れ込んだ荒々しい渓谷を形成し、対岸まで五キロ以上はあると思われる谷がえんえんとはるかバレンシアまで五〇キロ以上つながり、まるでミニグランドキャニオンのようでもある。



ローマ橋から見える村の風景　桜田義文

この渓谷の風景を見て旅人は立ちすくんでしまう。はたしてこの谷におりていっていいものか、しかし、谷底には民家らしきものが見え、生活の気配も感じられる。しかもかなり急で細いが道も下っている。おそるおそる車を乗り入れてみた。おそろしい傾斜で細い道をジグザグとおりる。谷底にはフカール川のエメラルドグリーンの水がゆったりと流れ、川の岸にだけに木立が続く、そしてその両側は切り立った崖で、空は思い切り狭い。崖ぞいに一本の道が一車線になったり二車線になったりしながら心細く続く。でもたまに民家があったり集落があったりする。民家はほとんどが洞窟住居である。洞窟住居というのはスペインではごくあたりまえで、石灰岩の崖に横穴を掘ってゆくとあたりまえだが洞窟ができる。そのままでいると石器時代になってしまうが、より住みやすくするために入口に石や煉瓦で柱や壁をつくり入口にドアをつけると家らしきものになる。冬は暖かく夏は涼しい快適な住居だという。

谷底の道をすすんでゆくと、目の前に小高い崖があらわれその頂上に城が見える。崖を回りこんだとたん目のまえに驚くほど大きなそして白い村が現れた。谷底にはフカール川がゆったりと流れ、ローマ橋がみえ教会の高い鐘楼もみえる。村は河から階段状に崖のうえの城まで隙間なく積み重ねられ白く輝いている。

旅人は目を見張って口をあけて、目の前に現れたまぼろしのような風景に圧倒されて声も出ない。この村はアルカラ　デ　フカールという名で、スペインの秘境の村として、最近注目されだしたらしい。たしかに村にはおおくの観光客が徘徊しているがほとんどがスペイン人だ。

ローマ橋の手前に車を止めて橋を渡り村に入る。両手を広げれば壁に当たるほどの狭い街路がほぼ水平に伸び、所々に上にあがる急坂や階段がある。ここは坂の街などというなまやさしい表現ではなく崖の街なのだ。登ってゆくとバールがある。のども渇いたしコーヒーを飲みに入った。カフェコンレチェを飲みながら観察すると、カウンターもイスも食器棚も岩を掘りだしたものであるし、何しろこの部屋も掘り出したノミの跡がある。「二階も見てこいよ」とマスターがいうので、やはり掘り出した階段を上って、やはり掘り出した二階のドーム状のしゃれた部屋に入

ると、やはり掘り出したテーブルとイスがある。窓があって外が見える。イスに座ってコーヒーを飲む。窓からは渓谷がみえる。見下ろすとはるか下にフカール川が見え、わずかばかりの林や教会の屋根が見える。恐ろしく高いところへ来てしまったようだ。

あとで下って駐車場から街を見上げるとはるか上の崖の中にいくつもの穴が見えた。あれが窓なのだろう。そうするとこの村はほとんど洞窟住居でできているのだ。

スペインで旅人は考える。こうした僻地ともいえる村からスペインを見ることが大切なのだ。マドリッドやバルセロナなどでは絶対見えない裸の部分が、周辺のひなびた町や谷底の村ではじめて見えてくるものだ。

おもしろWeb

全国ホタル研究会
http://www.geocities.jp/zenhoken/

ホタル関連のデータベース、関連の博物館、全国の団体個人へのリンクなどホタルに関する情報が満載。

ホタル関連文献目録
http://www.est.ryukoku.ac.jp/est/yuhma/HotRefHP/index.html
全国ホタル研究会・水と文化研究会作成の目録で、書籍や文献が多数収録されています。

日本 - 科学系 2064 編、民話 52 編、古典 106 編、文学 549 編
外国 - 科学系 711 編
追補文献 (主に 2000 年以降分)（構築中）

波紋

～民芸の街・松本～

ヒマラヤ杉がそびえる、緑豊かなあがたの森公園に爽やかな風が吹く。その中で５月末の土日、まつもとクラフトフェアが開催された。29 回目の今年は２日間で５万人もの来場者を迎えた。陶芸、ガラス、木工やホームスパンなど、約２６０のブースが並ぶ。応募者１０００人あまり、審査を経て選ばれた出品作品のクオリティは当然ながら高い。作品について、作家から直接話を聞くことができるのもいい。

とあるブースで、千葉からきたという若い女性陶芸家の作品が目に留まった。会場をひと回りした後、再び訪れて陶製の額を購入した。

このフェアは、各地のクラフトフェアの先駆けとなった。「環」創刊号に登場した中村功さんも、影響を受けてクラフトの道に入ったひとりである。９号で紹介した手作り家具の店の羽柴さん親子は、今年も出店して人気を集めていた。

松本民芸館では「柳宗悦が育んだ松本の民芸～クラフトの原点へ～」展を、松本市美術館では「柳宗悦展～暮らしへの眼差し～」が開催中であった。民芸の店が並ぶクラシカルな中町通りにも観光客があふれ、文字通り民芸の街となっていた。（はな）

忘却のえびす講物語

清水 たか子

（2）

昭和11（1936）年、川端康成がえびす講を見物に来て小説を書いていた

明治38（1905）年以降のえびす講は、各店が1年間秘術をつくした創作物を2階から出た下屋に飾りつけた。「綿良」が手持ちの綿を惜しげなく使って花咲かじいさんを作ったり、紙屋の「綿良支店」では巻紙を口にくわえた猿飛佐助を作ったりした。下駄の「志摩屋」、瀬戸物の「木村や」、「関口金物店」、「福田屋」なども意匠を凝らして飾りつけをした。下屋に飾り物をするという趣向は、道が狭かったのと目立ちやすいという上田ならではの客寄せのアイデアだったろう。これは昭和5（1930）年前後の昭和恐慌まで30年間続いた。

大正14（1925）年には商工会議所がえびす講の売り出しにテコを入れ、呼び物に大星河原（現在の大星神社）で二尺玉（直径60㎝）の花火5発を初めて打ち上げた。昭和4（1929）年には近県で初めてという三尺玉（90㎝）を打ち上げようとした時アクシデントがあった。大玉は夜空に打ち上がらないで300mも離れた道路脇に落ち、大型爆弾のような爆音がし大穴があいたという。この上田の花火の異変を知っている人はもう上田には居られないだろう。昭和5年には伝統の店頭飾りを止め、大型花火の大スターマインを打ち上げて大成功をおさめた。これがえびす講の花火の絶頂だったという。

次の年からの昭和恐慌により繭の売値が大暴落し、えびす講の大売り出しが中止されてしまった。やけっぱちになった養蚕家の中には、上田橋の上から千曲川に純白の繭を叩き捨てて行った人さえあったという。

昭和恐慌が尾を引く中、前のよ

うに大売り出しを盛況にするため、昭和９（１９３４）年からえびす講に花火だけでなく景品をというアイデアが打ち出された。

「一円以上お買い上げの客の中で、くじ引きで当たった人には俵入り白米一俵（60kg）ずつ百俵出す」とした。その事実を証明するために、原町郵便局前に百俵を高々と積み上げて見せた。このえびす講商戦で不況はいっぺんに吹き飛び、景気は回復した。押すな押すなの大盛況に味をしめた商工会議所では、この年から毎年米俵百俵を原町郵便局前に早くから飾り立て、購買力を大いに誘った。この企画は5年間続いた。

この米俵百俵の上田えびす講を見るために、作家・川端康成（１８９９―１９７２）は昭和11（１９３６）年11月20日上田を訪れている。『伊豆の踊子』『雪国』『千羽鶴』などの多くの名作を生んだ川端康成はこの旅をもとに『牧歌』という小説を書いている。

『牧歌』は昭和11年の明治天皇御巡幸と同11年の高松宮殿下の信州教育視察の旅と、この時の信州旅行を交錯させて描いている。別所温泉の柏屋別荘の離れに泊ってえびす講を見物に来た川端康成は、歩けぬほどの人出となっている原町や海野町を1人で見物した。彼が出会った風物は具体的にこの時代のえびす講を描き出している。

『牧歌』の1部を抜粋すると、

『「あれが久米正雄さんのお父さんが校長をしておられた学校を移して来た建物で、市役所になっています。元は公園の傍にありました」と上田商工会議所の屋上の見晴塔じみた部屋から教えられたものである。昨年の十一月二十日、年に一度の大売出しのえびす講の賑わいを上田と長野で見物するために別所温泉を

綿良の下屋に出した創作物（昭和４年）
「原町の歴史」田辺寛二郎著より

出て来たのだった。郵便局の前には福引きの米俵が百五十俵積み飾ってあった。水玉の提燈を連ね、ところどころの屋根の上に大きい人形の飾り物などして、歩けぬ程の人出を「信州の服装は暗い」などと眺めながら、大通りの商工会議所の物産陳列所に寄って、なにかの参考にと「上田地方産業研究資料集」とか「上田商工年鑑」とか会議所発行の書物を求めようとした。ところが事務所から出て来たのは、それらの本の編纂者岡田賢治氏で「本を買ってくれる人は全く珍しい、うれしいことである」と言って、上田市を見晴らせる部屋に昇り、方々を指さして説明してくれたのであった。』

「信州の服装は暗い」と川端康成はえびす講の人ごみを歩いて感じたようが、私の思うにはお祭りに行くには大抵の男の人は着飾って出かける。着飾る服装は「上田縞」の着物が多い。上田縞は染色が暗く地味なのが特徴であるため、そんな印象を与えたのか。川端康成が信州に深く関心を示したのは、昭和11（１９３６）年８月の明治製菓の斡旋による神津牧場行きからのことで、翌日から軽井沢の藤屋に９月まで滞在する。この後10月から11月にかけて、１か月余りの信州旅行をしている。『牧歌』はこの信州旅行をもとに書かれ『婦人公論』に連載された。

それにしても、米百俵の景品を郵便局前に積み重ねるという商法は、日本中を震え上らせた頑固な不況をふっ飛ばした。日本中に上田のアイデアは鳴り響いていたのだろう。川端康成の耳にも届いた。今の時代にも堂々と通用する商法と思う。私達は先人が残してくれたこの遺産を研究して受け継ぎたいものである。昭和13（１９３８）年になると戦雲急をつげ、戦後まで売るものがない大売り出しになってしまった。（つづく）

郵便局の前に積み上げられた景品の米俵（昭和９年）「原町の歴史」田辺寛二郎著より

『明日をひらく図書館－長野の実践と挑戦』

を発行しました

この度、本書を長野県の図書館関係者 20 数名が共同執筆して上梓しました。
目次は以下の通りです。

第１部　公共図書館の活動

第１章　明日をひらく図書館

１まちを元気にする交流図書館の挑戦！
　　前小布施町図書館長　花井裕一郎

２ＮＰＯ・市民協働の図書館づくりを目指して
　　ＮＰＯ上田図書館倶楽部　西入幸代

３読書からの地域づくり－「信州しおじり本の寺子屋」に見る塩尻市の図書館づくり
　　塩尻市立図書館長　伊東直登

第２章　長野県地域史資料データベース構築・公開事業－ＮＰＯ長野県図書館等協働機構が長野モデルをめざす
　　長野県図書館協会　事務局長　宮下明彦／前県立図書館長　寺沢洋行

第３章　図書館の可能性と論点整理
　宮下明彦／昭和女子大学教授　大串夏身／常磐大学・松本大学非常勤講師　内野安彦

第４章　広域的図書館情報ネットワーク

１上田地域図書館情報ネットワーク・エコール発足のころ
　　宮下明彦

２諏訪広域図書館情報ネットワーク・すわズラー
　　茅野市教育委員会　茅野充代

３南信州図書館ネットワークについて
　　飯田市立上郷図書館　宮下裕司

第５章　市民を支える図書館

１貸出日本一を 14 年間キープする富士見町図書館

富士見町教育委員会　平出裕一
２公募館長がプロデュースする伊那市立図書館
伊那市立図書館長　平賀研也
３障害者サービスが活発な長野図書館
長野市立長野図書館　増沢雅彦
４信州大学医学部附属病院に患者図書館が開館
元松本市中央図書館　有井洋子
５小さな村に図書館を
下條村立図書館　近藤明子
６「図書館のあるまち。だから大好き。」松本市分館整備の考え方と整備の道
元松本市中央図書館・南部図書館・県の森図書館長　手塚英男
第６章　信州図書館訪問記　宮下明彦
１県内屈指の老舗図書館が新たな図書館サービスに挑戦～飯田市立中央図書館
２いま、村の図書館が面白い～松川村図書館
３指定管理者制度を活かして専門性の高い職員集団をめざす～駒ヶ根市立図書館
４岩波書店出版物の殿堂～諏訪市立図書館・信州風樹文庫
５行政情報サービス・農業支援サービスに挑戦する～新東御市立図書館
【対談】～朗読とブドウと図書館と
軽井沢町立図書館長　青木裕子×宮下明彦

第２部　学校図書館・読書活動の実践

第１章　輝いてます！私たちの学校図書館
１校長が図書館長
茅野市立永明小学校長　山田利幸
２図書館活用生き生き術
辰野中学校司書　上島陽子
３原村の子どもたちと図書館
原村中学校・図書館司書　宮坂順子

４振り返ってできる読書活動の取り組み
小諸市立美南が丘小学校司書　望月美江子
５ブックトークで授業支援
蓼科高校司書　蓬田美智子
第２章　これからの読書活動
１読み聞かせ等読書グループ～山川とし子・小島佐和子
聞き手小林正代
２ブックトークの可能性を信じて
ＪＰＩＣ読書アドバイザー　小林いせ子
３民話と図書館
ＮＰＯ上田図書館倶楽部理事長　稲垣勇一
４長野県読書運動の過去と未来ー小笠原読書会に学ぶ
手塚英男

本書は、今県下で注目されている図書館、特色ある図書館、新しい図書館、歴史や伝統ある図書館、学校図書館や読書活動等について網羅している点が画期的です。

だが編集は大変でした。特に今年 2 月中旬に、K 大学の重要文化財の一室で行われた座談会は、有名な I 教授、O 教授や注目の前館長のH氏やU氏が顔を揃え、明日をひらく図書館に示唆を与える密度の高い座談会が行われました。しかし、出版社のミスによりその座談会原稿が結局ボツになってしまったことは返す返す残念でした。

印刷寸前の段階で、その 15 ページほどの穴埋めを急遽 O 教授と U 氏と私で書いたのが「図書館の可能性と論点整理」の第 3 章です。出来上がってみれば、図書館の可能性と論点を追求し、これからのあり方を示したものになったと自負しています。

私は平成６年の春に上田市立図書館長を拝命してからこの方、図書館と関わって今年でちょうど 20 周年を迎えています。今回の出版は期せずしてその記念になりました。

関心のある方は是非買って読んでみてください。一読すればあなたも図書館通になること請合います。

平成 25 年６月　編著者・長野県図書館協会　宮下明彦

あとがき

５月下旬から６月にかけ、信州大学において「蚕飼姫（こかいひめ）プロジェクト」が実施された。かつて上田地域で栄えた養蚕業を復活させようと、信州大学、上田商工会議所、上田紬組合が連携して行った。もと姫 20 人ほどがボランティアとして、給桑から繭取りまでの作業に当たった。育てた蚕は春嶺鐘月（しゅんれいしょうげつ）という何とも麗しい名前の種類６万頭である。

蚕を見るのも触るのも初めての私は興味深く参加した。まず、信州大学の金勝教授より「逃げない」「噛まない」「飽きない」蚕の生態や育て方について説明があった後、蚕さんとご対面。無菌飼育室で孵化したばかりの幼虫に人工飼料を与えた。この時の体長は４ミリ。２週間後、蚕室へ引っ越して桑の葉を食べ始める。毎日もりもり食べて日増しに大きくなり、２週間後、繭を作り始める。そして６月 19 日、出来上がった繭を集めた後、良不良に選別して全行程を終えた。出来上がった優良繭は約 80 キロ。そこから 18 キロの生糸ができるそうだ。上田産の生糸から上田紬ができる日も近い。

実習中、特に印象に残ったのは、桑の葉の間を動き回っていた蚕が１週間後には真っ白い繭に変身する過程だ。糸の元になるものを体内に溜め込んで少しずつ吐き出していく。そして楕円球体の繭を作る。１頭の蚕が吐く糸の長さは１．５～２キロメートルにもなるそうだ。本人は繭の中に隠れていて姿は見えない。動から静への劇的な変化に感動した。

自宅でも１頭飼ってみました

衣食住の衣に大きく貢献していた養蚕業。蚕の習性を利用することを発見した先人の知恵に思いをはせると同時に、大仕事をなし終えた蚕にも感謝の念を抱いた。（木漏れ日）

KAN
環　千曲川地域の人と文化　　第 11 号　　蒼翠
2013年 7 月発行
NPO 法人上田図書館倶楽部

表紙及び文中の写真は無断使用を禁じます

環スタッフ：
伊藤文子　海野 郁　西入幸代　宮下明彦
矢幡正夫　吉池みどり